

《第5分科会》

(テーマ)『子どもも保育者も共に楽しむ保育をめざして』

～一人ひとりを大切にしながら～

(発表園) 認定こども園 ひかりこども園

発表者 細田 若菜 衣笠 紘平

指導助言者 寺川 志奈子

司会者 森下 香

記録者 中宇地 景子

～研修レポートのまとめ～

【本研修会を受講して学んだことについて】

一人ひとりの思いを受け止めること・環境構成の大切さ

- ・子どもが無我夢中に遊ぶことができるためには、一人ひとりの姿や思いを受け止めることが大切であり、子どもたちの思いや願いから立ち上がる遊びだからこそ、主体的な姿や心の育ちが見られ、楽しさや満足感を感じることができるのだと感じた。
- ・子どものつぶやきをしっかりと拾い、広げて実現することで、子ども達は自由に遊びを展開し、自分の思いや考えを友だちと共有することができるのだと感じた。

保育者の関わりについて

- ・保育者の仕掛けやさりげない一言を子どもはしっかりと受け止めており、“教える”のではなく、自ら発想し、次へつながる言葉掛けや適切な間や働きかけをすることが大切である。
- ・一人ひとりが楽しんで遊び込んでいる背景には、保育者の丁寧な関わり、個性や思いを大切にしていることがある。普段から子どもたちの姿を把握し、共に遊びを考えたり、楽しさを共有したりすることの大切さを改めて感じた。

一人ひとりの参加や楽しみ方を認めること

- ・子どもたちが楽しさや満足感を感じるには、保育者が一人ひとりの楽しみ方、参加の仕方などを丁寧に受け止めることで、子どもたちの主体性を活かした遊びをより充実させ、自分らしい参加を可能にしている
- ・活動が予想以上に盛り上がることもあれば、あまり楽しんでいる様子が見られないことがあるが、子どもたちの感じる「楽しさ」や「面白さ」は何か、どのようにしたらそれらが感じられるかを子どもたちの姿から読み取ることも必要である。
- ・保育者が子どものありのままの姿を受け止める姿勢でいることで、子どもたち自身も友だちを受け入れ、アイデアや意見を共有して遊びを膨らませていくことができることを感じた。相談や話し合いの場面に繋がることで、自立心や協同性、言葉による伝え合いも育まれていくことが分かった。

遊びの完成形を決めつけない・自由さを大切にされた保育

- ・「遊びの完成形を決めつけない」ことで、子どもも保育者も「楽しくするためには」という同じ思いで遊びに取り組めると思った。子どもたちの「楽しい」を形にしながらか、一緒に保育を作っていく過程こそが大切で、その中で子ども達が成長していく。それを見守り、援助し、発達を見取っていくことの重要性を改めて考えることができた。
- ・子どもが主体的に活動を展開することで、達成感・満足感が得られ、「またやりたい」につながり、遊びに対する意欲が高まると感じた。
- ・子どものねがいや思いに寄り添い、自由な展開やイメージを大切にすることで、様々な参加の仕方ができ、一部の子もだけでなく全体的にみんなが楽しめる遊びになっている。

遊びのつながり・継続していくこと

- ・普段の遊びから全体への遊び、そしてみんなで協力して一つの遊び（行事）へと発展し、次のあそびに繋がることで、子どもたちにとって遊びはずっとつながっているものだと感じる事ができた。
- ・一つひとつの遊びを単独で終わらせてしまうのではなく、経験したことや子どもたちが作ったものなどを次の遊びにつなげていくことで、遊びへの関心が高まり、自分たちで作り上げていく達成感も感じられると思った。また、子どもの力を伸ばすことにもつながると感じた。
- ・子どもの興味や関心を丁寧に観察し、主体性から生まれるアイデアなどを大切にすることで子どもは無我夢中になり、遊びは続いていくのだと思った。
- ・時間をかけて自分たちで遊びをつくっていくことで、こうしたいという気持ちが芽生え、友だちの思いに気づき、協力する姿が見られるようになる。また達成感と、満足感を友だちと共有し、次への見通しをもてるようになるのだとわかった。

クラス外との連携

- ・園全体や異年齢交流を通して遊びの輪が広がり、子どもたちが成長する姿が素晴らしいと思った。保育者もクラスの垣根を越えて同じ思いで子どもたちに関わり、連携をとって保育の場を設定していく様子は、勉強になった。
- ・5歳児を中心に、園全体の子どもたちが“つながり”の中で過ごす保育実践というのがとても素敵だと思った。つながりの中で育つ子どもたちの成長は大きく、今の環境でできることを考え、工夫しながら日々の保育を楽しんでいくことの大切さを感じた。

異年齢交流を通しての成長や芽生え

- ・コロナ禍の中、異年齢児との工夫した関わりもあり、園全体で活動を楽しみ、子どもたちの思いやりや労りの心が自然と育っていることを感じた。
- ・異年齢児と何度も関わることで、同じ学年の子ども同士では気が付かないことや発見があると思った。また、小さい子どもも憧れをもったり、やってみたいという気持ちが芽生えたりと、“楽しい”“嬉しい”といった経験をみんなで一緒に積み重ねていくことで子どもたちの成長につながっていると思った。

コロナ禍での気づき

- ・コロナ禍にあり、異年齢交流や全園児での活動に制限がある中でも、今の環境でできることを考え、楽しく自発的に活動できる場を作るなど、工夫しながら日々の保育を楽しんでいくことの重要さを改めて実感した。

子どもの主体的姿の感じ方

- ・年長になると “遊びのPDCA サイクル” が行われ、自分たちで考え、実践してみること、気付いたことを改善しようとする、とつながりがあり、遊びの中で学んでいくことを再認識した。
- ・保育者が願いを持ちながら、子どもたちの思いを大切にしておいていくことで、どのような遊びに展開していくかを一緒に考えていきたいと思った。

「楽しい」とは

- ・「楽しい」とは、他人の評価から自由であり、我を忘れて遊びを楽しんでいることである。幼児期にどれだけ夢中で遊べる経験が出来るかが大切だということ学んだ。
- ・繰り返し目標をもって、友だちと一緒に時間をかけてできていく活動であり、保育者は願いを実現できるような環境構成を考えていくことが大切である。
- ・子どもが「楽しい」と言ってくれることが保育者にとっての「楽しい」や「これよかったんだ」という思いにつながり、保育という仕事の魅力であると改めて感じた。
- ・保育者と子どもたちの信頼関係や子ども同士のつながりが、遊びを通して広がったり深まったりと変化していくことも「楽しさ」をグレードアップすると思った。人間・時間・空間の間を大切にされた、まさに園とは遊びそのものであり、楽しいところとしてあるべきだと思った。

保育者として大切にしたいこと・5つのポイント

- ・保育者は子どもにとっての大事な栄養となる存在であり、豊かな土台となるためにも、様々な刺激や情報を知識として習得することが大切であると学んだ。また、子どもの育ちを園全体で連携をとりながら長い目で見守ることが大切だと感じた。
- ・“大事にしているポイント”の5つは、日々の保育の中で大事にしていきたいことであると感じた。改めて自分の保育を振り返り、共感や反省をすることもあった。

発表資料について

- ・動画や写真の掲載があり、子どもたちと一緒に作り上げていく保育、子どもたちの生き生きとした楽しみながら活動している様子がよくわかった。
- ・まとめに提示された遊びの展開のイメージのイラストが、とてもわかりやすかった。
- ・”ごっこ遊び”の歩み”の図が興味深かった。目に見えないことを図式化（見える化）していくことの重要性も感じた。
- ・エピソード記録を丁寧にとることで、流れがわかりやすくなると感じた。それぞれの学年・年齢に沿った遊びの中での経過が捉えてあり、心の動きや楽しみ方、変化がわかった。また、子どもの姿や保育者の願いも細かく記載されており、普段の保育の中にいろいろな思いが込められ保育が進んでいることを改めて実感できた。

【本研修を受講して、今後の保育実践に活かしたいことについて】

子どもの思いを大切に丁寧な関わり・環境構成

- ・子どもたちの声やつぶやきを大切に、「なんで?」「どうして?」「やってみよう」に寄り添い、日々の保育に取り入れて丁寧な関わりをすることで、一人ひとりが自己発揮できるよう努めていきたい。
- ・子どもたちのイメージが広がっていくような声かけや、環境づくり、主体性を発揮できる間を保障することで、友だちとの関わりを楽しめる環境を整えていきたい。

一人ひとりの参加や楽しみ方を認めること・個を大切にしたい関わり

- ・「楽しさ」の感じ方はそれぞれ異なり、ありのままの姿を丁寧に受け止めることで子どもたちも互いを受け入れ、アイデアを共有して遊びを展開し「豊かな楽しさ」へとつながっていた。
- ・一人ひとりの表情や動きを観察し、“何に興味・関心をもち、何を楽しんでいるのか”子ども目線に立って理解し、自分らしさが引き出せるような魅力のある保育へとつなげていきたい。

遊びに完成形を決めつけない・自由な発想やアイデアを大切にする

- ・保育者が遊びの完成形を決めつけず、一人ひとりの自由な発想を引き出したり受け入れたりすることで、友だちと思いや気づきを伝え合ったり振り返ったりする力となる。

遊びの継続・つながる遊びの実践

- ・継続的に活動を進めていくにはどのような働きかけや関わりが必要か考え、事前に見直しをもって遊びを構成し、子ども一人ひとりの『楽しい』を日々考えながら環境の見直しや工夫をしていきたい。
- ・日々のちょっとした時間の遊びをさらに充実させられるように環境や関わり方を工夫し、遊びや経験をつなげたり広げたりしていきたい。

保育者も共に楽しむ保育

- ・保育者自身も「楽しい!」「またしたい」と思える瞬間をたくさん覚えること体験することが大切で、環境を整えることのできる遊びのプロ集団でありたい。また、子どものアイデアに「それいいね」と賛同し、一緒に活動を楽しめる保育者でありたい。
- ・保育者のやりたい保育ではなく、周りの保育者も子どもも思わずやりたくなる保育を展開できるようになりたい。

異年齢交流・コロナ禍での保育

- ・コロナ禍でもできることを見つけながら少しずつ異年齢交流を取り入れ、一緒に楽しむ経験の中で人を思いやる気持ちを育てていきたい。
- ・次年度にまでつながる遊びや経験の継続はこれからの保育の中でも課題であるため、本研修で学んだことをヒントに活かしていきたい。

保育者の資質向上・取り組み・連携

- ・子どもたちのイメージを広げ、表現するための方法は、保育者がどれだけ引き出しをもち、柔軟な考えを提供できるかも関わっている。子どもたちにとってしっかりとした豊かな土台となるため、様々な刺激や情報を習得し続けて成長していきたい。
- ・園全体が自分たちの居場所でみんなが仲間だと思えるよう、保育者同士の連携も密にとりながら、全体で見守る保育をしていきたいと思った。

【ご意見・ご質問及び回答】

- ・「子ども達の姿」「遊びの経過」を的確に捉えながら「ねらい」を掲げ活動を展開し、「反省」から次へと発展する営みが途切れないこと、そして子ども達の声丁寧に拾い保育者自身も楽しんでおられる様子に驚いた。また異年齢での交流もすべての年齢の子ども達にそれぞれの育ちが確実に見られ、「コロナ禍でできない」とすぐに諦めてしまう現状から一歩前進したいという意欲をもらった。園全体での連携もかなり取られており、何事も継続して行うことは大変なことであったことと思う。

【その他】

- 馴染み深い『はらぺこあおむし』を題材に劇遊びをされており、1年間の思いを取り入れながら進めたことで、子どもたちが主体となり月～土までの食べ物の替え歌や顔出しパネルの製作に至るまで、楽しいが見ていて伝わってきた。子どもたちと先生方のアイデアがたっぷり詰まっており、動画からも食い入るように見ている他学年児の姿に、みんなが楽しいと思える環境だな、こんな保育を園全体でしていきたいな、と日々の保育を振り返りました。顔出しパネルの穴が開くタイミング最高でした。
- 年間を通して保育を継続させることは難しく、特にコロナ禍で活動に制限がかかってしまう現状もある中、ここまで素敵な保育をされていることに脱帽でした。